



ゲストスピーチ 交換留学生 伊藤心音さん

会長挨拶 会長 鈴木孝純君

7月の2800地区独自の会員増強月間に引き続き、8月はロータリーの会員増強月間です。クラブの活性化のためにも新しいメンバーの受け入れに皆で努めて頂きたいと思っております。

さて、お盆の最後の締めくくりとして、8月21日から23日まで、庄内地方の各寺院では先祖の中でも近い親族の供養を目的とする「もり供養」が行われます。お盆に来て供養を受けた先祖の霊は、仏の国に帰るとき、いったん森の山に集まるので、再び供養するという信仰が背景にあります。参詣者は「ほとけいた」と呼ばれる経木塔婆に供養する仏を書いてもらいます。本来ならば戒名を書くのですが、もり供養のときは、何月何日の仏と命日を書いてもらいます。そして、五色の梵天、花、線香、蠟燭、菓子など供物を供えます。また、仏前に供えるものを閻伽（あか）と言い、価値あるもの、功德という意味です。転じて、仏前または墓前に供える浄水を「あか」と呼び、水は汚れたものを浄化するものとして仏事に用いられるようになりました。実は、庄内を流れる「赤川」の由来は、湯殿山霊場に供える浄水が流水したところから名づけられたと言われています。

もり供養が終わる頃になると、夏の連日続いた晴天も必ず雨になると言われています。これを「もりのあか流し」と言い、降雨によって何もかも清められるということの意味しています。そして、一雨ごとに涼しくなり、季節も秋

に向かうと言われてきましたが、最近の異常気象ではこのような移り変わりはあまり期待できないかもしれません。

以前、ある新聞社が世界規模で実施した「何かの宗教を信じているか」の問いに対して、YESと答えた日本人は26%で世界148か国中136位でした。

一方、ある世論調査では、92%の日本人が、墓参り、祈願、礼拝など宗教につながる行事に係わっているようです。宗教心が薄いと言われていた日本人ですが、この結果から、日本人は、特定の宗教に対する信仰心は強くないかもしれないものの、宗教的な気持ちを大切に民族と言えらると思います。

宗教学者の山折哲雄氏は、西洋は「信ずる宗教」、日本は「感ずる宗教」との興味ある持論を展開しています。つまり、西洋の一神教的世界観においては、神を信じるか信じないかが重大な問題であるのに対して、多神教的世界観である日本人は、神や仏の気配を感じるか感じないかが重大なことのようにです。

古来、日本人は農耕民族として移り変わる自然の変化に順応し、そこに人間を超える神や仏や先祖の気配を“感じ”ながら謙虚に生きてきました。そして、“感じる”からこそ、差別なく多くのものを摂り入れ、自然を含めて何ごとにも慈悲の心を抱く信仰心が育まれました。どのような宗教でも人間救済を目的としていますが、今一度日本の「感ずる宗教」の深遠さを考えてはいかがでしょうか。



幹事報告 小野寺佳克君

- 樹木を守る『チャリティーゴルフコンペ』
- 『チャリティー募金』
- 『ポリオ募金』
- 9/23 ニューブラッサムガーデンクラブ